

田原本町埋蔵文化財調査年報 2

1990年度



唐古・鍵遺跡第40次調査



唐古・鍵遺跡第42次調査



唐古・鍵遺跡第42次調査



平野氏陣屋跡第2次調査



1991

唐古・鍵遺跡第40次調査

田原本町教育委員会

例　　言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が平成2年度に実施した発掘調査及び試掘・立会調査の概要を緊急的にまとめたものである。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要を作成中である。国庫補助事業としては、唐古・鍵遺跡第44次調査をおこなっている。
2. 本年報の執筆は、北野隆亮・藤田三郎があたり、編集は藤田がおこなった。

目　　次

1.はじめに.....	1
2.調査した遺跡の概要.....	4
(1) 唐古・鍵遺跡第40次調査.....	4
(2) 唐古・鍵遺跡第41次調査.....	7
(3) 唐古・鍵遺跡第42次調査.....	8
(4) 唐古・鍵遺跡第43次調査.....	9
(5) 唐古・鍵遺跡第44次調査.....	10
(6) 千代遺跡第1次調査.....	12
(7) 小阪里中遺跡第3次調査.....	13
(8) 平野氏陣屋跡第1・2次調査.....	14
(9) 金剛寺遺跡第3次調査.....	16
(10) 阪手カハウト遺跡.....	18
(11) 十六面・薬王寺遺跡第6次調査.....	20
(12) 保津・宮古遺跡第3次調査.....	21
3. 試掘調査・立会調査の概要.....	22

1. はじめに

田原本町における発掘届・通知件数は、昭和63年度44件、平成元年度47件と増加傾向がみられてきたが、平成2年度においては32件に減少し、やや開発事業も落ちついてきたようである。平成2年度の33件の内訳は、第57条の2が22件、第57条の3が10件である。このうち、発掘の通知は14件となる。田原本町教育委員会のおこなった発掘調査は、前年度からの繰り越しが5件、本年度7件の12件である。

これらの発掘調査では、いくつかの重要な成果が得られているので、ここに時代ごとまとめてみる。

旧石器・縄文時代 旧石器・縄文時代の遺跡はまだ見つかっていないが、縄文土器片は唐古・鍵遺跡第42次調査で1点、第44次調査で2点出土している。前者は後期、後者は晩期の土器である。第44次調出土の2点は凸帯文土器の長原式であるが、弥生時代前期末の遺構などから混在状況で出土している。近年、田原本町内の遺跡から晩期土器が出土することが多くなってきているが、晩期の遺構については未だ検出していない。

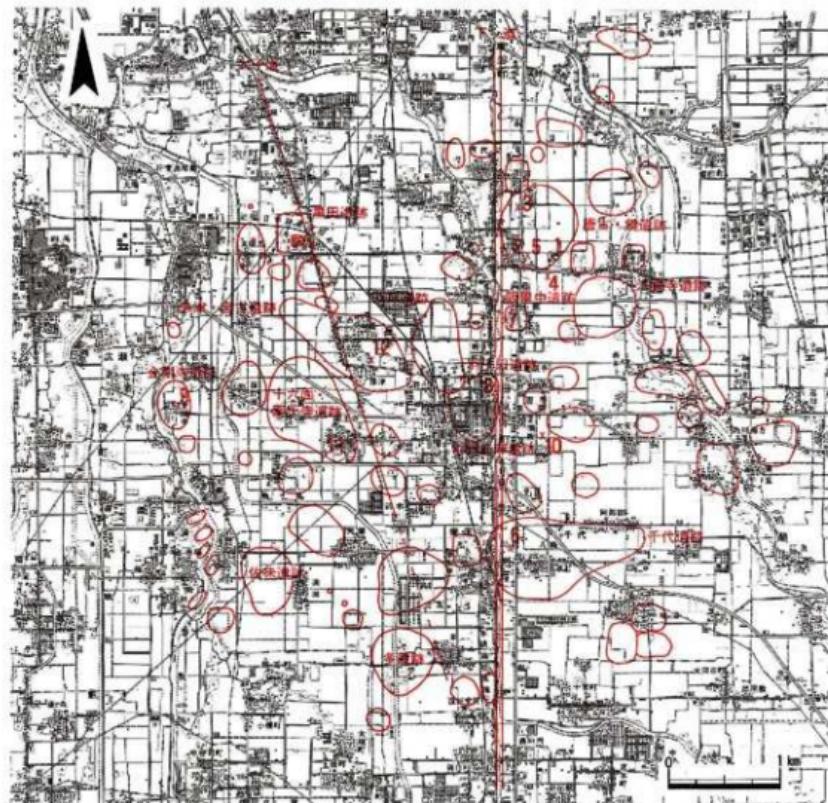
弥生時代 弥生時代の遺跡の調査は唐古・鍵遺跡で第40~44次調査としておこなっている。第40次調査は遺跡の南端で、3条の弥生時代中・後期の環濠や壇棺・古墳時代前期の井戸などを検出した。遺物では青銅器鋳造関連の送風管や板状鉄斧など注目すべき遺物の出土をみ、改めて遺跡の重要性を再認識することとなった。第41次調査は遺跡の最も西にあたる場所の調査で、弥生時代前期末の大溝を検出した。これは、前期段階に西地区をとり囲む環濠となるようである。第42次調査は第31調査と同じ場所で環濠を検出し、また、第43次調査は第39次調査の東隣接地で河跡を検出した。第44次調査は、遺跡の南西部にあたり弥生時代前期から後期までの大溝や土坑などを検出した。この調査では近江産の甕がまとまって出土し、大和地方との併行関係を考える上で重要になろう。

古墳時代 古墳時代の調査として注目されるものに、十六面・薬王寺遺跡第6次調査がある。この調査では布留期の方形周溝墓が2基検出された。本遺跡での方形周溝墓は初めてであり、この周辺に墓域が拡がっていることが想定できるであろう。

平安時代~江戸時代 中世から近世にかけての遺跡の調査も近年増加傾向にある。千代遺跡、小阪里中遺跡第3次調査、平野氏陣屋跡、金剛寺遺跡第3次調査、阪手カハウト遺跡などがある。このなかで、千代遺跡、平野氏陣屋跡、阪手カハウト遺跡は初めての調査となり、遺跡の性格解明に大きな足掛りとなった。千代遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物と井戸が検出され、周辺の「日光寺」等の小字名から寺院関連の遺跡と推定された。平野氏陣屋跡では中世から近世にかけての遺構が検出された。特に、江戸時代の遺構は平野氏の屋敷関連のも

のと考えられ、大溝とその関連施設（桟橋？）は屋敷地の東側の環境を知るうえで重要になろう。阪手カハウト遺跡も中世から江戸時代末にかけての遺跡である。この調査では、中世の木棺墓と土塚墓、大溝が検出され、周辺の小字名から中世寺院の寺域内に推定された。また、木棺墓上に築かれた塚は江戸時代から現代に至るまでの民間信仰の対象となっており、多量の銭貨と土師器小皿（灯明皿）が出土した。これは近世からの民間信仰地を発掘するという希有な例となり、その形成と消長を考える上で重要であった。

小阪里中遺跡は、第1次調査の西側で中世の大溝等を検出し、1次調査との関係を把握できるようになった。金剛寺遺跡は第2次調査の南側で、同様の遺構を検出したことから遺跡の東側区画線が現在まで残存していることが判明し、金剛寺城の範囲を知る手掛りとなった。



第1図 田原本町の遺跡と発掘調査地点（番号は第1表に対応する）

第1表 平成2年度発掘調査一覧表

	遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時代	調査担当	備考
1	唐古・難	第40次	田原本町唐古 158-1他	田原本町長	北小学校体育館改築	1990. 5. 11 - 8. 15	760m ²	弥生	藤田 北野	
2	唐古・難	第41次	田原本町唐古 374	松田敏夫	個人住宅改築	1990. 6. 4 - 6. 14	20m ²	弥生・中世 近世	藤田	
3	唐古・難	第42次	田原本町唐古 64-4, 65-1	植田康嗣	レストラン新築	1990. 7. 11 - 9. 21	740m ²	弥生・中世	藤田	受託事業
4	唐古・難	第43次	田原本町唐古 35-40	田原本町長	通学路建設	1990. 10. 31 - 11. 15	150m ²	弥生	北野	
5	唐古・難	第44次	田原本町唐古 268-1	吉原忠一	農業用仓库	1991. 2. 12 - 4. 6	130m ²	弥生	藤田	加賀補助事業
6	子代	第1次	田原本町子代 336	大谷住宅 株式会社	分譲住宅建設	1990. 5. 14 - 6. 2	240m ²	古墳・中世	北野	受託事業
7	小阪至中	第3次	田原本町小阪 289-1他	名原開發 株式会社	分譲住宅建設	1990. 7. 23 - 8. 10	300m ²	中世	北野	受託事業
8	平野氏庫所	第1次	田原本町 (郭内) 829	庄瀬季永	住宅進入路整備	1990. 6. 4 - 6. 7	24m ²	中世・近世	北野	
	平野氏庫所	第2次	田原本町 (郭内) 809-1他	庄瀬季永	個人住宅新築	1990. 8. 21 - 9. 27	230m ²	中世・近世	北野	
9	金剛寺	第3次	田原本町 金剛寺	田原本町長	水路改良工事	1991. 1. 8 - 2. 2	200m ²	古墳・中世 近世・近代	北野	
10	坂手カハウト	—	田原本町坂手 842-2 843	松村重敏	アパート建築	1990. 9. 25 - 11. 12	100m ²	中世・近世	藤田	受託事業
11	十六面・東王寺	第6次	田原本町南坂 寺379-3-6	晃和開発 株式会社	分譲住宅建設	1990. 12. 10 - 12. 25	150m ²	弥生・古墳 中世	北野	受託事業
12	保津・宮古	第5次	田原本町宮古 61-1他	田原本町長	道路整備	1990. 12. 3 - 12. 4	47m ²	現代	藤田	

2. 調査した遺跡の概要

(1). 唐古・鍵遺跡第40次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積池に立地する。調査地は遺跡の南端部にあたり、本地の西側を第3次、東側を第4次調査としておこなっている。第3次調査では、銅鐸などの鋳造関連遺物が出土している。この付近は唐古・鍵弥生ムラの居住区から環濠帯にあたる。

遺構の概要 調査では東西21m、南北36mの調査区の全面で、弥生時代から古墳時代前期の諸遺構を検出したが、一部は体育館の基礎によって破壊されていた。弥生時代前期では、調査区の北端で木器貯蔵穴を検出しているが、前期の遺構は少ない。弥生時代中期になると、南西から北東方向に3条の大溝が走向する。北からSD-104、SD-102B、SD-103Bとなる。SD-104は溝幅約6m、深さ2.3mを測る大規模なもので、ムラの内濠になると思われる。この大溝は弥生時代中期末頃の厚い洪水堆積層（砂層）によってほぼ埋没している。SD-102はSD-104の南6mに掘削された幅約5.5mの大溝である。本溝も同様な砂層堆積がみられるが、再掘削によって取り除かれている。SD-103Bはやや規模は小さくなり、幅約3~4mの溝となる。本溝には砂層堆積はみられない。弥生時代後期において、これら3条の大溝のうち、SD-104は埋没、SD-102B・SD-103Bは再掘削され（SD-102・SD-103）、SD-102Bの溝については西端で分岐する溝（SD-101）が新たに掘削される。これらの溝は古墳時代前期まで再掘削や溝さらえを繰りかえし、継続することになる。古墳時代前期には井戸（SK-101）1基がある。推定直径約2.5m、深さ1.8mを測るもので、



調査地全景（弥生時代前・中期）（右が北）



SD-104大溝 鋸・鉤出土状況▶
(弥生時代中期)



◀SK-101井戸 中層木製品出土状況
(古墳時代前期)



SK-101井戸 下層土器出土状況▶
(古墳時代前期)

井戸の下層から完形の壺・甕9点、中層からツチノコが12点出土している。

遺物の概要 大量の弥生土器の他、各種遺物が出土している。土器では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が大半を占め、特にS D—101の西部では多くのミニチュア土器が出土し、これらと混在して土製の勾玉4点も検出された。木製品については、S D—102B・S D—104から出土した鍬や鋤があり、柄つきの鍬4点が含まれている点は注目される。また、古墳時代前期の井戸からは12点のツチノコが出土し、ツチノコの中央溝に繩が残っているものもあった。この他、重要遺物として板状鉄斧1点がS D—101から、フイゴの送風管3点がS D—102から出土した。

まとめ 本遺跡においては第3次調査以来の大規模な発掘となった。調査ではムラの南東側を囲む3条の大溝を検出し、第3・9次調査の大溝とのつながりをおさえることができた。S D—104などにみられる洪水堆積層は弥生時代中期に大規模な洪水があったことを物語っている。また、遺物では奈良県内2例目となる板状鉄斧が出土し、鉄器の使用が裏づけられた。フイゴの送風管は3点と少なく、铸造関連遺物の出土量からいえば、第3次調査の北あるいは西側に工房跡があった可能性がでてきた。



弥生時代後期環濠完掘状況（東から）

(2). 唐古・鍵遺跡第41次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地は、遺跡の南西部にあたり、これまで調査例がないことから全く不明のところであった。また、弥生集落と重複する中世居館跡の推定内部にもあたっている。

遺構の概要 小規模な調査であったが、4つの遺構面を確認した。時期別では、弥生時代前期と中期、中世、近世である。中世の遺構は掘立柱建物の根石を検出している。近世の遺構は井戸2基と素掘り小溝2条である。弥生時代では前期の大溝1条、中期の土坑と柱穴各々2基がある。注目されるのは前期の大溝で、東南東から西北西方向に走向している。溝幅推定5m、深さ1.4mを測るが二段掘りで下段の幅は1.5mで急に深く掘削している。この大溝から多量の土器とともに長さ1m前後、径0.1m弱の杭が約25本検出された。

遺物の概要 小規模な面積であったが、遺物はコンテナ40箱に及んでいる。なかでも弥生前期の大溝から出土した土器が大半を占める。これらの土器のなかには伊勢湾沿岸地域のものも数点含まれており、注目される。土器のほか、木製品としては、弥生時代前期の大溝から出土した杭がある。この杭は先端を尖らせただけで、他の部分には樹皮が残っている。

まとめ 調査では、弥生時代前期と中期、中世、近世の遺構が検出された。中世の遺構は居館に伴う一連のものであろう。注目されるのは、弥生時代前期の大溝である。この大溝はその走向方向から前期段階の西地区の環濠になる可能性が高い。その範囲はおよそ400×200mとなる。弥生時代中期以降は本地よりさらに西方へ拡大するようで、ほぼ弥生集落の範囲はおさえられた。この調査成果は大きい。



弥生時代前期大溝完掘状況（東から）

(3). 唐古・鎌遺跡第42次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地は、遺跡の北西部にあたり、この周辺では第6・12・15・17・21・31次調査がおこなわれている。特に第31次調査は本地と同じところであり、弥生時代の環濠と中世末期の井戸や大溝を検出している。

遺構の概要 調査は第31次調査の2つのトレンチ間をおこなったが、本地の約1/4は大規模な塹芥処理穴が掘削され破壊されていた。遺構には弥生時代と中・近世の2時期のものがある。

弥生時代の主要な遺構は5条の大溝である。大溝はいずれも南西から北東方向に走向する。大溝は大きいもので幅約9mを測る（SD—101）が、他のものは4~6m前後である。5条の大溝は弥生時代後期には開口し、SD—101は弥生時代中期後半まで潮る。

中・近世の遺構としては、井戸3基と焼土面をもつ建物跡、南北方向の大溝がある。井戸の一つには曲物を転用した井戸枠2段分が残っていた。焼土面をもつ建物跡は周囲に溝をもつものでかまど状の施設と考えられる。南北方向の大溝は第31次調査で検出した東西方向の大溝と一連のもので、逆L字形の区画を形どっている。

遺物の概要 遺物には弥生時代と中・近世のものがあるが、いずれも少ない。弥生時代の大溝からは建築材や流木などが多く出土した。また、中世末期の井戸では、瓦質風炉や滑石製の石鍋片が出土している。

まとめ 今回の調査では、弥生時代と中・近世の二時期の遺構・遺物がみられた。弥生時代の大溝はいずれもムラの北西端を限る環濠で環濠帯を形成している。中・近世の諸遺構は推定されている「唐古氏」の居館の北側に形成された、大溝に区画される屋敷地であることが判明した。その規模は水田地割と小字名「城ノ前」からすると南北100m、東西60mである。



調査地全景（北東から）

(4). 唐古・鍵遺跡第43次調査

位置と環境 標高48m前後の沖積地に立地する。調査地は遺跡の南端部、第40次調査地の南へ約100mの地点である。弥生時代の唐古・鍵ムラを取り囲む環濠帯の外部にあたる。平成元年度に調査をおこない、弥生時代中期から後期の河道を検出した第39次調査地点の北西に隣接する。第39次調査では河道の左岸（南東側）を検出しており、今次の調査では右岸の確認が調査目的のひとつであった。

遺構・遺物の概要 調査地区の南半部分で弥生時代の溝2条と第39次調査で確認されている河道の右岸を検出した。北側の溝1は最大幅3m、深さ0.4mを測り、東南から北西方向に蛇行する。おそらくは河道周辺の窪地状の溝であると考えられ、弥生時代中期の壺などの土器片が出土している。溝2は東西方向に西流し、幅約2m、深さ0.3mを測る。河道は調査地区の西南端でわずかにではあるが右岸を検出することができた。

まとめ 今回の調査では、第39次調査の成果をうけ弥生時代中期～後期の河道の右岸を検出することができた。河道幅はこれによって推定すると30m前後の規模を測る。また第39次調査で明らかにされた居住区・環濠帯・河跡の順で構成される唐古・鍵遺跡について、集落外部南側での様子を知るための貴重な調査となった。



調査地全景（南から）



弥生時代遺構（北から）

(5). 唐古・鍵遺跡第44次調査

位置と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。今回の調査地は遺跡の南西部にあたり、これまでに第16・33次調査が周辺でおこなわれている。第16次調査は本地の西北西30mの地点で、弥生時代前期の大溝3条、中期の大溝3条などを検出している。第33次調査は本地の東70mの地点で、弥生時代前期から古墳時代前期までの多量の遺構・遺物を検出しており、いずれの調査からしても本地は居住区内の一画であることが予想された。

遺構の概要 東西10m、南北13mの調査区を設定し、3面の遺構面を確認した。弥生時代前期の遺構としては、前期末から中期初頭にかかるものが中心で、大溝2条（SD-201・SD-202）と落ち込み状遺構（SX-202）、土坑1基（SK-201）がある。SD-201の大溝は東北東から西南西に走向するもので、第33次調査地を含めた南地区を囲む環濠になる可能性がある。落ち込み状遺構は性格不明の遺構で、調査区の南西部に拡がっている。粘土と砂の互層堆積で、河川の氾濫とも考えられる。この遺構から縄文時代晩期の土器1片が弥生土器と混在して出土している。弥生時代中期の遺構としては、大溝3条、小溝3条、土坑10数基、柱穴などを検出している。大溝は東北東から西南西に走向するものが2条（SD-103・SD-108）がある。SD-103は中期の中頃から末にかけて除々に埋没しているもので、南北に走向する大溝に合流している。SD-108はSD-103の北側に併行しているもので、中



期中頃に開口していたものである。弥生時代後期の遺構は調査区の南西隅で検出した大溝1条と中央部で検出した井戸2基（SK-101・SK-105）がある。井戸では完形土器が供獻されていた。

遺物の概要 今回の調査では、小規模な調査ながら多量の遺物の出土をみた。遺物のなかでは特に土器が多い。弥生時代中期から後期の大量の土器があり、主にSD-103の大溝から出土している。この大溝からは搬入土器として近江産の甕が4点出土しており、大和地方との併行関係を考える上で重要になろう。また、弥生時代前期末から中期初頭の土器と混在して縄文時代晚期後半の深鉢（凸帯文）が2点出土した。本遺跡でも、近年の調査でこの時期のものが数点出土しており、ムラの生成を考える上で重要になろう。他に土坑や溝からざるの断片が出土している。

まとめ 本調査地は遺跡の南西部にあたり、従来この地区の様相があまりよくわかつていなかったところである。今回の調査は小規模であったが、弥生時代前期から後期の遺構を多く検出し、ムラの一様相をおさえることができた。弥生時代前期末頃から居住区内となり、中期頃にはムラを区画する大溝が走向する。しかしながら、多量の土器の出土に反し、他の木製品・石器・獸骨等の遺物が少ないことは、居住区内でもややはずれの様相を示していると考えられる。



SK-101井戸 土器出土状況（弥生時代後期）

(6). 千代遺跡第1次調査

位置と環境 標高51m前後の沖積地に立地する。周辺は城下都路東八条一里に条里復元されており、延久二年（1070年）の興福寺難役免坪付帳に記載のある興福寺領の八条南庄が存在したものと考えられる。調査地の南には「日光寺」「極楽」「中殿」など寺院に関する小字名が残っている。

遺構の概要 古墳時代後期と中世（平安・鎌倉時代）の遺構を検出した。古墳時代後期の遺構は北東から南西方向に走向する幅0.8~1.2m、深さ約0.2mの溝である。中世の遺構は平安時代前期と考えられるピット群と平安時代後期と考えられる井戸を1基、鎌倉時代前期の小溝群と鎌倉時代中期に主体をもつ掘立柱建物群および井戸3基である。掘立柱建物は東から柱間2間以上×1間以上、4間×1間以上、2間×1間以上の3棟復元することができ、東の建物は柱を抜き取ったものと考えられ、他の2棟は柱の基部を根石と共に残していた。

遺物の概要 遺物は瓦器椀・土師器皿など中世の土器が主体を占める。古墳時代後期の溝からは土師器や須恵器が出土している。特筆すべき遺物には鎌倉時代中期の井戸から出土した「棒はかり」と推定される木製品がある。

まとめ 今回の調査では、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺構、および遺物を検出することができた。従来から知られる古墳時代から中世にかけての遺物散布地としての千代遺跡の西部地域での様相の一端を解明した貴重な調査であったといえる。とくに鎌倉時代の掘立柱建物群や井戸を検出したことは重要な成果であるといえる。この遺構群は瓦の出土や小字名などから寺院跡の一角である可能性が高く、その範囲は調査地の東と南にひろがることが確実となった。



調査地全景（上が北）

(7). 小阪・里中遺跡第3次調査

位置と環境 標高48m前後の沖積地に立地する。当遺跡の北約500mには弥生時代の環濠集落唐古・鍵遺跡、南西約600mには牛の埴輪を出土した羽子田遺跡（古墳）がある。また寺川を狭んだ西岸には式内社の鏡作神社がある。調査地の東側および南側隣接地では既に発掘調査がおこなわれ、弥生時代の大溝や古墳1基、中・近世の大溝などの遺構を検出している。

遺構の概要 鎌倉時代前期から室町時代前期にかけての遺構を検出した。鎌倉時代前期のものは東西方向に幅6m、深さ約0.7mの耕作遺構がある。この耕作遺構は小溝を数条件なもので、広陵町箸尾遺跡に類例が報告されている。鎌倉時代後期から室町時代前期のものは幅3.3m、深さ0.9mの南北方向の大溝1条およびそれに東からとりつく大溝2条がある。大溝の付属施設として南北大溝に東からとりつく大溝のうち北側のものとの合流地点に杭をもちいた堰をもつ。これらの大溝群が埋没後、南北大溝だけ再掘削され、南端では新たに南北方向に溝が掘削される。

遺物の概要 遺物は主として大溝群から出土した瓦器椀、土師器皿、土釜などの土器類のほか中国製白磁碗・褐釉四耳壺などの輸入陶磁器類がある。

まとめ 今回の調査では鎌倉時代前期の耕作遺構と鎌倉時代後期から室町時代前期にかけての大溝群を検出することができた。とくに大溝群は第1次調査で検出された室町時代後期から近世にかけての在地武士・小阪氏に関係する大溝群の前身的な遺構としてとらえられ、区画溝的な機能を有したものと考えられる。これらの大溝群は中世の大和における環濠集落についての具体的な資料となり、第1次調査の検出遺構と共に貴重な成果であるといえる。



調査地全景（左が北）

(8). 平野氏陣屋跡第1・2次調査

位置と環境 調査地点は標高約49mの沖積地に立地する。寺川の西に隣接し、十市郡路東十六条一里に条里復元される。中世には周辺に在地武士・田原本氏、西に小室、南に楽田寺が存在したと考えられている。中世後期、戦国時代には有力在地武士の著尾氏や十市氏に占拠されることもあったが、文禄四年（1595）平野権平長泰が領有し、以後は平野氏の支配に帰するものとなる。ただ近世初頭、慶長六年（1601）から正保四年（1647）の間は教行寺（現存する本誓寺と淨照寺の敷地を合わせた場所に建立されていた）が平野氏の下、寺内町を形成する。平野氏の陣屋が形成されるのは二代目長勝になってからのことであり、慶安元年（1648）以降のことである。調査地自体は近世前期に成立した平野氏の陣屋のほぼ中央部に相当し、平野氏二代目当主平野長勝以来の屋敷地内にあたる。

遺構の概要 第1次調査では室町時代から江戸時代にかけての溝などの遺構を検出した。第2次調査では室町時代中頃の北東から南西に流路をもつ幅2~3m、深さ約0.8mの大溝を検出した。江戸時代のものは大溝4条などを検出した。大溝1は南北方向の溝と考えられ、延長28m以上、東西幅7m以上、深さ0.9m以上をはかり、杭を打ち込んだ護岸施設をもつ。この護岸施設の延長上で幅約2m、長さ約1.5mにテラス状に突出する部分があり、その突出部分に平行して南北方向に杭が約1m間隔で2列打ち込まれる。その杭の下には杭列に沿って南北方向に丸太が組まれた下部構造を有する。これらの杭群は棧橋であると考えられ、突出部分とあわせて船着き場であったと推定できる。この大溝1と同時期と考えられる大溝2を調査地区東南隅で検出した。規模は東西幅1.5m以上、延長10m以上をはかる。またこの大溝2と大溝1をつなぐ溝を2条検出したが、これらの溝は北側のものは瓦質や土師質製



第1次調査区全景（西から）



第2図 平野氏陣屋跡調査位置図

の土管を埋設し、南側のものは箱形の木樋を埋設したものであった。これらの遺構はそれぞれ勾配が逆に作られており、大溝間の水位を調整したものと考えられる。大溝1、2は江戸時代後期のものであり、江戸時代中期のものでは大溝3、4がある。大溝3は幅約8m、深さ約1.3mをはかり東西方向に5m以上続き、調査地区東南隅で南へ直角に曲がっている。大溝4は調査地区的北端部で検出されたもので東西方向に走向方向をもち、大溝1に西側部分を壊されている。

遺物の概要 遺物は大溝1を中心に江戸時代の瓦、肥前系磁器・京焼などの陶磁器、土師器皿・土釜などの土器、漆器梶・下駄などの木製品、火打ち石などが多量に出土している。

まとめ 第1次調査で室町時代～江戸時代の遺構の存在を確認し、それをうけて第2次調査では室町時代～江戸時代の大溝などの遺構や遺物を確認することができた。とくに江戸時代の大溝を検出したことは平野氏の屋敷地の展開を考えるうえで貴重な成果である。また大溝1内に設けられた桟橋は船着き場と考えられ、大溝1と大溝2をむすぶ水位調節の埋設施設（土管・木樋）などと共にその評価は今後の課題となろう。室町時代の遺構面と江戸時代の遺構面が明確にされたことも重要な成果であり、それらの遺構面の間に存在する整地土からは鉛製の火縄銃の鉄砲玉が1点出土している。この整地土の時期は特定しがたいが、出土遺物からみて室町時代後期から江戸時代前期の間であることは確実であり、平野長勝の陣屋建設時の整地である可能性が高い。室町時代の遺構面で検出された大溝は在地武士・田原本氏との関係で理解してゆかねばならないであろう。その他、今回の調査では弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器、また瓦器などの平安・鎌倉時代の土器も出土しており、当遺跡は複合遺跡と考えられる。



第2次調査区全景（北から）



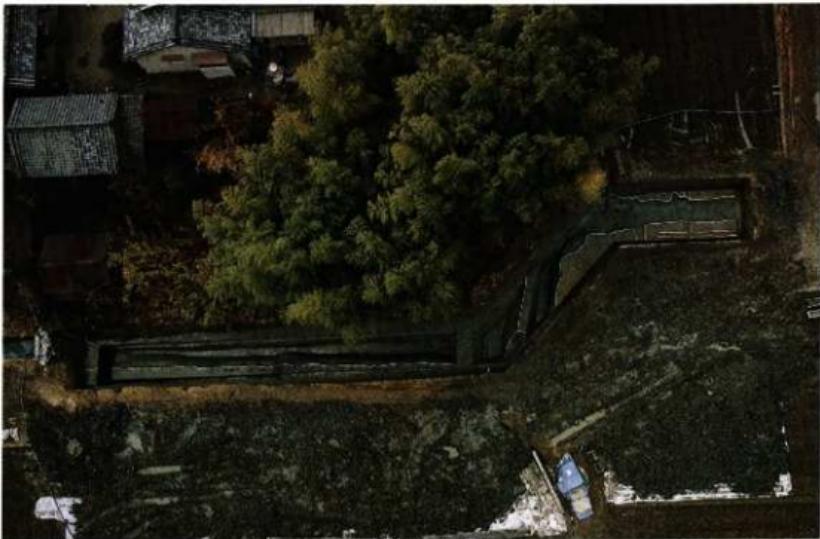
桟橋（北西から）

(9). 金剛寺遺跡第3次調査

位置と環境 標高46m前後の沖積地に立地し、曾我川の東に隣接する。金剛寺遺跡は中世の文献上に登場する金剛寺氏の「金剛寺城」と推定される遺跡で、これまでの2次にわたる調査で中世では第1次調査で内部を区画する大溝と橋脚、第2次調査で遺跡北側を東西方向に走向する大溝を6条検出した。また古墳時代初頭の住居跡、溝や奈良～平安時代の河跡などを第2次調査で検出している。今回の調査地は現金剛寺集落の北東隅の水路部分にあたり第2次調査の南側に相当する。

遺構の概要 遺構面は古墳時代前期から江戸時代末期頃までの5面を確認した。これらの遺構面は第2次調査で確認している4面に対応するものに最上面を加えたものである。古墳時代前期の遺構面には調査地の北西端の黄褐色粘質土が基盤となる微高地に対して、その縁辺部分に帯状に堆積する落込み状遺構がある。平安～鎌倉時代の遺構面は小溝群、および東西方向に走向し現金剛寺集落を区画する可能性のある大溝を確認した。室町時代前期～後期の遺構面では現金剛寺集落を囲む大溝（環濠）などを、また室町時代末期～江戸時代後期の面では再掘削された大溝（環濠）などを検出した。江戸時代末期の遺構面ではさらに再掘削された大溝を検出することができた。

遺物の概要 遺物は中・近世の土器類が主体を占め、古墳時代前期と奈良時代の土器が少量



調査地全景（右が北）

出土する。とくに室町時代末期～江戸時代後期の大溝（環濠）からの出土遺物が多く、肥前系染付碗など陶磁器類、火鉢・土釜などの土器類、漆器椀・下駄などの木製品、瓦、砥石などが出土している。

まとめ 今回の調査の最大成果は金剛寺集落の環濠の時期的な変遷と規模をある程度明らかにできたことである。中世金剛寺集落の環濠の初現が平安時代後期に遡る可能性を指摘することができた。また本格的な環濠の成立は室町時代前期以降になってからのことであり、推定幅8m以上、深さ2m以上の大規模なものである。またこの段階での環濠は水の流れがほとんどの滞水状態であったことが指摘できる。この環濠は室町時代末期に再掘削され、江戸時代後期まで存続する。この段階でも推定幅5m以上、深さ1.6m以上と規模をやや縮小させながらも前段階と同様の環濠の性格を有していたと考えられる。しかし、江戸時代末期頃に再掘削されたものは推定幅4m以上、深さ1m以上とさらに規模を縮小し、とくに深さが浅くなり周囲の溝とほぼ同程度となる。ここで環濠としての本来的な機能は退化し、水路としての機能が強調される。以後現在の用水路の幅1.5m、深さ0.8m程度までに規模を縮小させながら継続して使用されている。もうひとつの成果は、第2次調査で確認された4面の遺構面について追証することができたことと、同じく第2次調査で検出された古墳時代初頭の竪穴式住居跡などが立地する今回の調査地北西に展開する微高地とその南東に広がる低湿地との境界を明確にすることできたことである。



古墳時代遺構面（南から）

⑩. 阪手カハウト遺跡

位置と環境 遺跡は標高50.5mの沖積地に立地する。水田の一画に南北4m、東西3.5m、高さ0.5mの塚として残っており、戦前までは「クサガミサン」として信仰をあつめていた。塚頂部には瓦製の社などが散在し、塚の東斜面には榆の木が2本生えている。『大和国古墳墓取調書』に記載されており、これによると小字名は「カハウト」であるが、地元では「カワラド」として呼んでいる。また、本地の南西側に「仁王前」の小字名がある。

遺構の概要 調査では、中世の木棺墓・土塙墓各1基、中世大溝1条、小溝群、近世～近代の塚を検出した。木棺墓と土塙墓は長軸6～7m、短軸3m、高さ0.4～0.5mの盛土に掘られているもので、ほぼ南北に主軸をもつ。両者とも北端で歯を検出したことから北枕である。中世大溝も南北方向のもので、幅2.2m、深さ0.4mを測る。墓域を区画する溝と考えられる。小溝群はいわゆる「中世素掘溝」で、墓地以外の全面で検出した。塚（マウンド）は墓地の東側につくられたもので、最終的には約1mのマウンドを形成するが、このマウンドは5面にわたる旧表土層を有している。いずれも江戸時代末期から現代に至るものである。

遺物の概要 出土遺物は木棺墓から土師器小皿2枚、中世大溝等から瓦器、土師器小皿・羽釜が出土している。また、塚からは瓦製社、土師器小皿（灯明皿）、錢貨（寛永通寶・文久永寶）、火縄銃の鉄砲玉など近世～近代の遺物が出土している。



塚（マウンド）全景（西から）

まとめ 今回の調査は小規模なものであったが、現存する民間信仰地を発掘調査するという希有な例となった。「クサガミサン」として江戸時代以降信仰されたこの塚は、中世寺院に付属する墓地がその起源と考えられる。今後、中世寺院の範囲を推定していく必要があろう。



塚の土層堆積状況（北東から）▶



◀塚 遺物出土状況



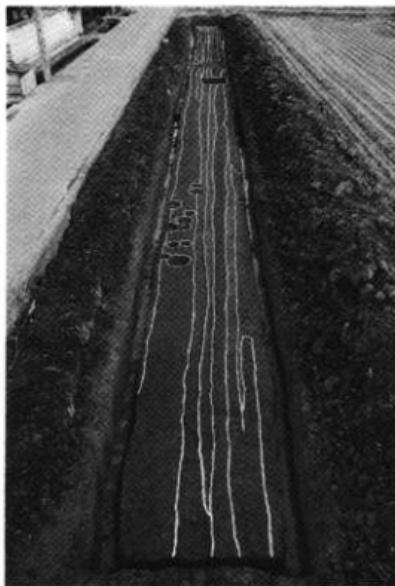
塚 遺物出土状況▶

(11). 十六面・薬王寺遺跡第6次調査

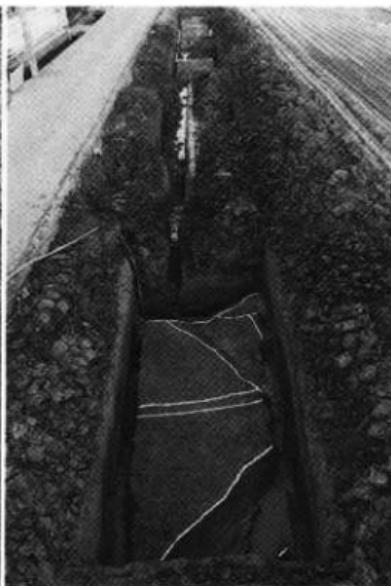
位置と環境 標高47m前後の沖積地に立地する。十六面・薬王寺遺跡はこれまでの5次にわたる調査で、弥生時代の溝状遺構・河道などや古墳時代の水田遺構・井戸等の諸遺構、中世の集落跡などが検出されている。なお今回の調査地は遺跡の東南部にあたる。

遺構・遺物の概要 弥生時代後期の河道、古墳時代前期の方形周溝墓二基、中世の小溝群、ピット群、井戸などを検出した。弥生時代後期の河道は南東から北西に流路をもち、幅21m、深さ1m以上をはかる。出土遺物は壺・甕などの土器が細片で出土している。古墳時代前期の方形周溝墓は2基検出しており、2基とも二側辺の一部を確認した。したがって両者とも規模については不明である。西側のものは溝幅1~1.3m、深さ0.4mの規模を測り、溝内からは板状の木材を検出した。東側のものは弥生時代後期の埋没河道上に重複して造られ、溝幅8m、深さ約1mを測る。溝の底で完形品の土師器の壺と甕を検出した。これらの方形周溝墓のマウンドは後世の削平をうけている。

まとめ 今回の調査は十六面・薬王寺遺跡の東南縁辺部の様相をあきらかにし、当地が古墳時代前期の墓域の一角であることを確認した貴重な調査となった。



調査地全景（中世）（西から）



調査地全景（弥生・古墳時代）（西から）

12. 保津・宮古遺跡第5次調査

位置と環境 遺跡は標高45~48mの沖積地に立地する。調査地は宮古池（新池部分）の南西隅である。散布地の中心部分と目される地区である。

造構・遺物の概要 調査は池堤内に南北19m、幅2~2.5mのトレンチを設定した。トレンチの約3分の2にあたる南側はすべて池の掘削によって破壊されていた。わずかに残った北端では浅い梢円形の土坑1基を検出したが、時期不明である。遺物は土器小片が出土した。

まとめ 今回の調査は小規模で大部分が破壊されていたことから、遺跡の内容についてはよく把握できなかった。弥生時代の造構については、希薄な地域の可能性もある。中世寺院については北あるいは東側に拡がっていると考えられる。



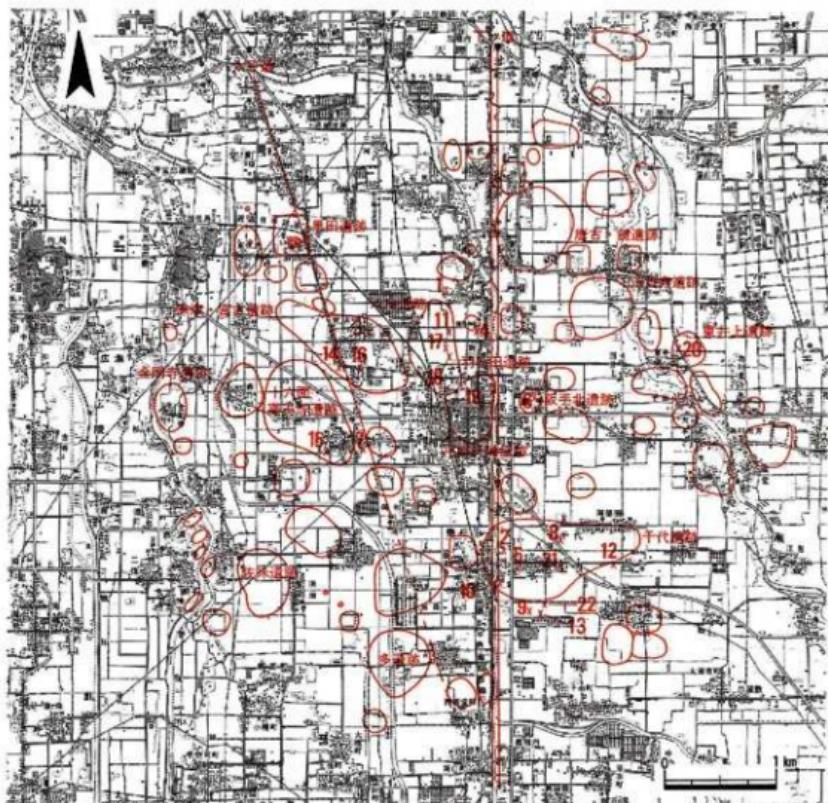
調査地全景（南から）

3. 試掘調査・立会調査の概要

試掘調査と立会調査は平成二年度で22件を数える（第2表）。特に集中しているのは田原本町千代付近と八尾付近でいずれも田原本町の市街化が進んでいる地域である。

千代遺跡では9件を数え、千代336番地では中世遺物包含層を確認したので本調査に変更となった。千代306番地では中世の埋没水田面を確認できた。十六面・薬王寺遺跡では薬王寺379-3番地他で中世・古墳時代の遺物包含層および遺構面を確認し、本調査に変更となった。

それ以外で成果のみられたものは十六面・薬王寺遺跡で中世・古墳時代の遺物包含層、保津・宮古遺跡、平野氏陣屋跡、東井上遺跡で中世あるいは近世の遺物包含層を確認した。

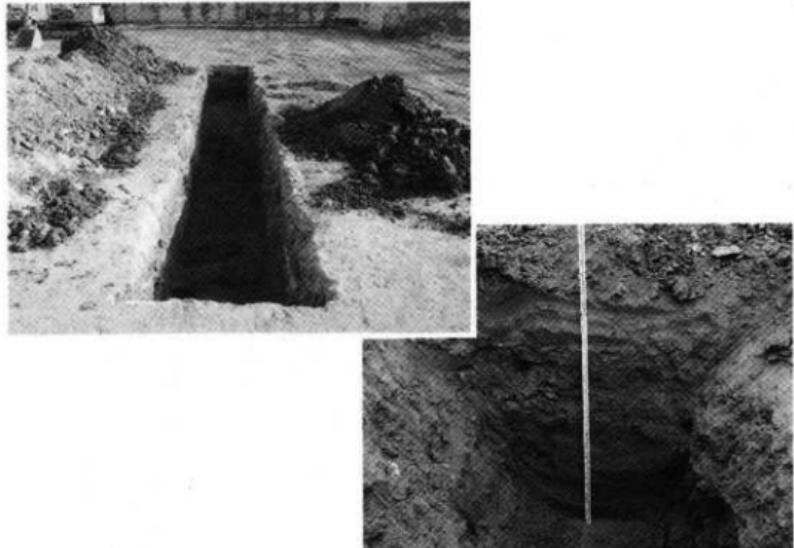


第4図 田原本町の遺跡と試掘調査・立会調査地点（番号は第2表に対応する）

第2表 平成2年度試掘調査・立会調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進捗番号 (田代文)	進捗日	調査日	内 容
1	八尾	田原本町八尾 164	南大阪音織 (有)	専用住宅建設	178	1.8.28	2.2.17	遺物等は未確認。
2	千代	田原本町千代 336	大谷住宅 株式会社	宅地造成 住宅建設	275	1.10.19	2.3.12	平安鎌倉時代の遺物包含層を確認し、本調査に変更。本調査成果は本年報のP12に掲載。
3	保津・宮古	田原本町宮古 270-1	田原本町長	案内板設置	—	—	2.3.15	深さ0.3mの表土下に中世遺物包含層を確認。
4	八尾	田原本町八尾 572,573-1-5	森又ホーム 株式会社	宅地造成 住宅建設	6	2.4.6	2.4.6	4×4mの試掘坑を深さ1.5mまで掘削する。遺構・遺物は未確認。
5	千代	田原本町千代 1116-4	周橋清郎	青空駐車場	176	1.8.28	2.5.18	表土の再掘削により掘削面は耕作土に及んだみ。
6	阪手	田原本町阪手 365-1	森岡 弘	造成・倉庫建設	—	—	2.6.6	掩埋部分の立会で深さ1.0m掘削。遺物包含層は未確認。
7	十六面・薬王寺	田原本町薬王寺 69-1,2	株式会社 樫ホーム	宅地造成 住宅建設	41	2.5.9	2.6.27	3×3mの試掘坑を深さ2.2m掘削。中世、及び古墳時代の遺物包含層を確認。
8	千代	田原本町千代 883-3,884-1, 885-1	安村和寄地	農業用倉庫建設	40	2.5.7	2.8.16	遺物等は未確認。
9	千代	田原本町千代 161,163,164	堀内和子	青空駐車場	119	2.7.12	2.8.24	2×2mの試掘坑を深さ1.4m掘削。遺物等は未確認。
10	千代	田原本町千代 306	田原本町長	体育館建設	137	2.8.15	2.8.27	2×15mの試掘坑を設定。深さ1.2mで中世の輕便水田面を確認。ヒト、ウシ等の足跡、小礫を検出する。
11	八尾	田原本町八尾 555-1,3	辻木木材産業 ㈱	青空駐車場 水路改修	278	1.10.25	2.10.9	水路改修部分で立会。遺物等は未確認。
12	千代	田原本町千代 1063,1064	小笠幸次	青空駐車場	39	1.5.9	2.10.17	掩埋部分の立会で深さ1.2m掘削で遺物等は未確認。
13	千代	田原本町千代 145	戸川忠男	宅地造成	167	2.9.25	2.10.23	2×2mの試掘坑を深さ1.3m掘削。遺物等は未確認。
14	保津・宮古	田原本町宮古24	吉井第三郎	住宅建設	168	2.9.25	2.11.13	遺物等は未確認。
15	十六面・薬王寺	田原本町第5号 379-3,4,5,6,	見和開発 株式会社	宅地造成 住宅建設	161	2.9.7	2.11.19	2×2mの試掘坑を設定。中世及び古墳時代の遺物包含層及び遺構面を確認したため本調査に変更。本調査成果は本年報のP20に掲載。
16	保津・宮古	田原本町保津 131-2	栗山源逸	農家住宅建設	143	2.8.21	2.11.22	浄化槽部分で立会。中近世遺物包含層と深さ1.0mで遺構面を確認した。
17	八尾	田原本町八尾 373-1,2	田原本町長	下水路改修	147	2.9.1	2.12.22	掩埋部分で立会。深さ1.5mの掘削で八尾遺跡第2次調査で検出している河底の延長を面的に確認する。

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進達番号 (田教文)	進達日	調査日	内 容
18	八尾	田原本町八尾 373-1,2	田原本町長	下水路改修	147	2.9.1	3.1.7・8	No17の南側での再立会。遺物等は未確認。
19	平野氏陣屋	田原本町762	山辺広域行政 事務組合	防火水槽埋設	289	3.2.7	3.2.22	深さ1.8m削削。近傍 遺物包含層を確認した が遺構の有無は未確 認。
20	東井上	田原本町東井上 170-1,171-1, 172-1	春岡年秋	資材置場	206	2.11.15	3.2.25	擁壁部分で立会。深さ 0.8mの掘削で中世遺 物包含層を確認。遺構 面はさらに下であると 思われる。
21	千代	田原本町千代 1016-1・2,1017, 1018,1019	株式会社 オキナ	工場建設	272	3.1.17	3.3.7	2×2mの試掘坑を深さ 1.4m削削。遺物等は 未確認。
22	千代	田原本町千代 146他	鹿双ホーム 株式会社	宅地造成 住宅建設	106	2.6.21	3.3.19	排水管敷設時に立会。 遺物等は未確認。



▲ 十六面・薬王寺遺跡立会調査(7)

田原本町埋蔵文化財調査年報2

1990年度

平成3年3月30日

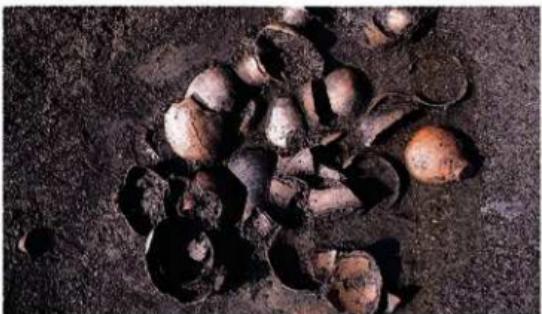
**編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 関西美術印刷株式会社**



唐古・鍵遺跡第41次調査



阪手カハウト遺跡



唐古・鍵遺跡第44次調査